研究ノート

川端康成『古都』論

――エーリヒ・ケストナー『ふたりのロッテ』との類似点――

廣島毬子

はじめに
第一章　川端とケストナーの来歴・共通点
第二章　『ふたりのロッテ』と『古都』の共通点・接点
第三章　『ふたりのロッテ』と『古都』の類似点　双子の姉妹がもつ共通点
第四章　ケストナーと川端の接点
第五章　母への道
おわりに

川端康成の作品『古都』は、昭和三十六年（一九六一）十月初筆、三十七年一月完結。「朝日新聞」連載百回の小説であり、最初から構想を練ったり結末を考えたりしていない。思いついたように、双子の姉妹を主人公にした作品で、川端にしては淡白な着想であるので、「どこかにヒントがあったのでは？」と考えた。前年（一九六〇）には国際ペン大会（ブラジル）に出席。その五年ほど前から、海外との交流が盛んになっているが、英語は解さない。

エーリヒ・ケストナーの作品『ふたりのロッテ』は、映画化されヒットしている。十年後（一九六〇）、国際アンデルセン賞を受賞。翻訳され海外に流布。『古都』は翌年の執筆である。筆者は以前にミュージカル「ふたりのロッテ」を観劇したが「似ている！」と直感。

類似点として、始めにスミレ（すみれ）が描かれている。双子の姉妹、九歳のルイーゼ（ウィーン住）とロッテ（ミュンヘン住）も、二十歳の千重子（中京）と苗子（北山）も、不幸な生い立ちで互いに未知の人であった。菫は文字の緒として出会いを象徴している。

衝撃の出会いは夏。生地は、ルイーゼとロッテはドナウ川のリンツ。千重子と苗子は清滝川の北山杉の里。二人とも実の両親とは無縁であり、川は人生そのものと言える。

金銭感覚として、家政婦のつける家計簿をチェックするロッテ、番頭にまかしていた帳簿を調べる千重子。川端にしては珍らしい設定である。恋については、二人が区別できない男こそ気のどくだとキリアン校長先生がいう。千重子と苗子が一つになってしまう秀男の迷い。二人は一人の幻となる。

川端は七十三歳（一九七二）で自死。ケストナーは七十五歳（一九七四）で死去。共に七十歳代まで戦時を生き抜いたペンマンである。

はじめに

川端康成が小説『古都』を完結編として、新潮社から出版した昭和三十七（一九六二）年のころ、筆者を含めて、若者たちは話題になった本を読み、映画化されると追いかけるように観にいった。今、改めて再読してみると、廃れゆく京の景色、京の言葉を惜しんで「いまかいておかないと…」という川端の強い美意識を知らされるとともに、川端作品にしては淡白な双子の姉妹という想定は、どこかにヒントがあると考えた。直感として、ドイツの児童文学者エーリヒ・ケストナーの『ふたりのロッテ』が閃いた。日本では劇団四季のミュージカルとしてヒットしている。両親の離婚により、父と母はべつべつにひきとられて育った二人の少女が夏休みに林間学校で巡り会う。始めは抵抗するがやがて親しくなり、別れた両親を仲直りさせようと作戦を練る。秘密の計画は成功し、両親は再婚、もとの家族に戻るというハッピーエンドの物語である。

『古都』の結末は双子の娘が別れるようにもとれるが、後は読者の推測に委ねているとも考えられる。雪の降る早朝、千重子は苗子に「これは、あたしがあげるの。また、来とおくれやすな」と言って、コオトと折りたたみ傘と高下駄を渡す。律儀な苗子はいつか返しに来るだろう。もう少し大人になって現実を自覚するだろう。川端は、『ふたりのロッテ』と同様に幸福な結末にしようと考えていて、九歳のかわいい双子の少女を、二十歳のきれいな双子の娘に変身させたのである。冒頭のさわやかなスミレはひっそりとしたすみれに替えられるが、ここが川端の筆力である。

両者とも一八九九年生まれの同い年（亥年）。体形的には、広い額、睨むような大きな眼、聴き逃さない大きな耳、痩せ型、短身（ケストナーは一六八センチ）。体は剛健ではなく、ともに徴兵検査不合格。出生より始まる平凡な家庭を知らない不幸。初恋は失恋。多数の賞を受賞し、ペンクラブの大役をこなす社交性はありながら無口でもあった。終生美しい幻の母を夢想しつづけた川端。内縁の妻より愛人より母恋いの人であったケストナー。一人を二人に分けた文学ともいえる。

川端がケストナーの作品から最も影響を受けたと思われる形跡として、双子の出会いのシーンとその会話である。少女がふたり、友だちになったばかりの時には、話したりたずねたり答えたりすることがたくさんある。

「あんた九つだったわね？」とルイーゼがたずねます。
「ええ、」とロッテがうなずきます。「十月十四日で一十になるの。」ルイーゼはロウソクのようにまっすぐ

こしかけなおします。「十月十四日ですって？」「十月十四日に。」ルイーゼはからだを前にかがめて、ささやきます。「あたしも！」ロッテは、人形のようにかたくなります。（中略）「それで、あんたはどこで生まれたの？」ルイーゼは、なんだか、こわいことでもあるように、小声でためらいながら答えます。「ドナウ川のリンツで！」ロッテはかわいたくちびるを舌でなめます。「あたしも！」庭の中はしいんとしています。[1]

『古都』では祇園祭の宵山（七月十六日）がクライマックスとなる。祇園花見小路あたりから四条大橋を渡り御旅所（四条寺町）へ、花街の人たちが通う「行ったり来たり七度半」という「無言詣で」の風習である。筆者の祖父も父もあのあたりの出身でよく聞かされた。川端の情景とはやや違う点もあるが、やはり、千重子と苗子の出会いにふさわしい。

「なに、お祈りやしたの？」と、千重子はたずねた。「見といやしたか」と、娘は声をふるわせた。「姉の行方を知りとうて…。あんた姉さんや。神さまのお引き合せどす」と、娘の目に涙があふれた。[2]

その後、松竹でも大映でも映画化しているが、やはりこのシーンに力を入れている。京都人としては、京の女ことばについても違和感はあるが、川端の美意識、孤独感を表現した文学として秀逸と考える。半世紀過ぎた今も話題になっていることを喜び、京都を知る者の視点を生かして書いていきたい。

第一章　川端とケストナーの来歴・共通点

川端康成は、明治三十二年（一八九九）六月十四日、大阪市北区天満此花町一丁目七十九番屋敷に生まれた。父栄吉（明治二年一月十三日生まれ）、母ゲン（元治元年七月二十七日生まれ）の長男。父は東京の経済学者で医業を修めた医師で、浪華の儒家易堂にも学んだ。漢詩、文人画などにも親しむ文学趣味の人で谷号と号した。虚弱体質で胸を患っていた。母および祖母のカネ（天保十年十月十日生まれ）は黒田家の出身。祖父は漢方医の心得があり、東村山龍堂の屋号で製薬販売にかかわり、家想学にも造詣が深かった。

川端家は、北条泰時（鎌倉幕府の執権、義時の長子（一一八三－一二四二）より三十一代目の末孫、七百年続いた旧家である。川端康成は、大阪出身であり、関東に長く居住したにもかかわらず、日本的「美意識」が強く、千二百

年の都であり、今もその名残りを留めている京都にこだわっていた。一方では終生「孤独感」の思想に生きる侍の感性を持ち続けたのは、自身の血によるものであろう。最後まで介護をした祖父から、繰り返し伝えられた血統の話は、生涯離れることのできない、芸術家精神の基（もとい）となっている。

祖父三八郎は、大正三年（一九一四）五月二十五日に死去をした。

昭憲皇太后の御大葬の夜に祖父が死んだ。私の十六歳の夏である。祖父は息を引き取る前に痰が気管につまって胸を掻きむしるやうにして苦しんだ。仏様のやうな方だのに往生際にどうしてかうお苦しみになるのかと、枕辺にゐた一人の老婆が言った。[3]

老婆は、多分親しくしていた近所の人であろう。老人と少年との二人の食事など家事のために通いの家政婦はいたが、その人ではない。葬式当日、康成少年は会葬者から弔問を受けている最中に突然鼻血を出した。翌朝親戚や村人と六十七人でお骨拾いに行っている。その時はもっと激しく鼻血を出して止まらなかったが誰にも知られなかった。全村五十軒が康成を哀れんで泣いてくれた。女達は可哀そうにと声をあげて泣いた。川端は人々の心を素直に受けながら傲然と反発もした。

エーリヒ・ケストナーは、一八九九年二月二十三日、ドイツの南東、ドレスデンのケーニヒスブリュッカー通り六十八番地で生まれた。生後まもなくプロテスタントとしての洗礼を受けている。かつてのザクセン王国の首都であり、エルベ川のほとりに栄えた都であったが、エーリヒの生地は、新町と呼ばれる貧しい労働者たちが住む安アパートであった。

父エミールは、皮革職人でまじめな働き者、母イーダは、近所でも評判の賢い娘であった。紹介結婚で愛のない生活が続いていた。産業革命の時代（一七六〇－一八三〇）の影響受けて、手仕事職人は工場労働者として雇われ、貧乏暮らしを支えるために母イーダは美容師として働いた。少年エーリヒもビラまきなどをして母の仕事を手伝った。イーダは、一人息子エーリヒのためにだけ生き抜いた強い女性であった。八十歳で死去した（一九五一・五）が、痴呆症になりつつあったイーダを看病したのはエミールで、終生やさしい人柄であった。

エーリヒは母イーダの不倫の子であった。ユダヤ人の血を引く医師、ケストナー家の主治医ツィンマーマン博士が実の父親であった。少年のエーリヒは親切なおじさんとして遊びにいっている。時にはケストナー家に経済的な援助

もしてくれた。ケストナーが十五歳のときに第一次世界大戦（一九一四）が始まり十八歳で徴兵される。このとき始めてイーダから実の父親のことを伝えられた。エーリヒは絶句したが、目前に戦場があり、生きて帰還出来るかどうかの瀬戸際でもあったので、動転した気持は整理できた。

それでも、戸籍上の父エミールと生母イーダは長い歳月を共に生き抜いた。この戸籍上の親子関係のお蔭で、エーリヒはナチス政権の迫害から身を守れたといえる。実の父ツィンマーマン博士はブラジルに亡命した。育ての父エミールは口数の少ない人で、息子とはいえエーリヒは殆んど会話もしなかった。母イーダが亡くなってから、息子の愛情が父エミールに向いていく。旅行嫌いの父がはじめて息子の招待を受けてミュンヘンへ旅立つ。エーリヒとルイーゼロッテの快適な家で、エミールはのんびりと休暇を楽しんだ。ケストナーは、回想記『わたしが子どもだったころ』に、はじめて父の記憶を書いた。

《とうさんは、その忍耐強い生涯において、めったに忍耐の糸を切らしたことがなかった。とうさんは手仕事の名人であり、いつでもほほえみの名人だった。今日でもそうである。[4]》

心が通うようになったエミールは、翌年（一九五七）の十二月三十一日（大晦）にドレスデンで死去。九十一歳であった。本当の肉親（実父）が形ばかりの父以外に存在するというケストナーの状況は、肉親（父母）を幼くして失った川端の孤独感と共通するところがあると考える。

第二章　『ふたりのロッテ』と『古都』の共通点・接点

『古都』では、主人公である一卵性双生児の容姿が、全く同じきれいな娘。一人は町の子、一人は鄙の子が書かれている。この設定はどこから生まれたのか、なにかヒントでもあったのか。川端の「『古都』を書き終へて」によると、次のようなことばがある。

（前略）小説「古都」であるが、こんなに私自身に妙な作品は、これまでもまあなかった。私はあらかじめ筋立てをしない悪い癖があるが、今度のやうに思ひがけない、妙なことはついぞなかった。新聞百回だから、小さく愛すべき恋物語を書くつもりだったのだが、まったく意外にも、ふた子の娘の話になってしまった。書く前に考へてみもしなかったことである。われながら実にふしぎである。（中略）恋の場面も、ぬれ場、

争ひの場面などが、一つもない。（中略）ほのかな暗示のところで終ったのは、ほんたうに幸ひであったか。[5]

筆者の少女時代は中原淳一画のファンで、少女雑誌『ひまわり』を購読していた。今では記憶もさだかではないが、昭和二十年代半ばごろ、川端康成の少女小説「万葉姉妹」が連載されていた。両親を早く亡くした孤児同志、同じ血の絆を持つ少女の話であった。

昭和二十四年（一九四九）、エーリヒ・ケストナーは、『ふたりのロッテ』のシナリオを書いている。最初から映画の台本として書かれたもので、両親の離婚問題の提起をしている。教育者たちから批判の声があがったが、新しい時代の新しい子供の本として大成功。第一回ドイツ連邦映画賞（一九五〇）を受けている。児童文学作家ケストナーの名前は、世界的にも不動のものとなった。

翌年、最愛の母イーダがドレスデンで亡くなる。長年のコンビ、さし絵画家ヴァルター・トリヤーも亡命先のカナダで死亡。喜びと哀しみの五十二歳、ケストナーの輝かしい第二の人生が始まる。これまでは、心の支えであった母へ詩や手紙を送りつづけていた。ナチス政権下でありながら、亡命せず最後までドイツに留まった作家は、ケストナー一人であった。自国を愛し母親想いの息子は、老いた母を置いて、自分だけ逃げることはできなかったのだ。

昭和三十五年（一九六〇）、ケストナーは『ふたりのロッテ』で国際アンデルセン大賞を受賞。川端が『古都』を朝日新聞に執筆を始めたのは、昭和三十六年（一九六一）である。川端がこれに触発されたとしたら、十年来、このテーマを温めてきたことになる。

戦後、昭和二十年代後半より四十年代にかけては映画の黄金時代となり、川端作品も毎年のように映画化されている。松竹と大映が競うようにして作成した。川端は映画関係者とも交流をもっていた。

ケストナーの『ふたりのロッテ』は、昭和二十六年（一九五一）、美空ひばりの一人二役“ひばりの子守唄”という題名で大映によって上映されている。双子の少女の名前は、ひばりとすみれと名付けられてヒットした。それを川端は見ている筈である。三年後の昭和二十九年（一九五四）、やはり美空ひばり主演の『伊豆の踊子』が松竹によって上映され、川端自らも出演している。このあたりから、いつかは双子の娘をテーマにした小説、それも和の心を大切にした上品な作品を書いてみようと思い立ったのではなかったか。

新聞掲載中の『古都』に対して、新村出は感想文「古都愛賞」を書いている。川端は恐縮しながら、感謝の気持を

伝え小説の説明をしている。その文中に「すみれ」が出てくることに着目したい。京の町屋の坪庭にすみれの種が飛んできたとも思えない。『ふたりのロッテ』の1章の始めにも「スミレ」が描かれている。すみれの花言葉は、「白は無邪気な恋、紫は誠実・愛」。川端自身、若い恋人の象徴が双子の姉妹の象徴になったと書いている。十年来抱き続けてきた意中の小説を、ここで表現する気になったと推察する。

第三章　『ふたりのロッテ』と『古都』の類似点
双子姉妹がもつ共通点

両者とも冒頭に出てくる「菫」に着目する。『ふたりのロッテ』の主人公は九歳の双子の少女。ルイーゼとロッテ。ケストナーの生涯の伴侶となったルイーゼロッテ・エンダーレの名前からとっている。(1)

みなさんは、いったいゼービュールをご存じですか。山のなかの村、ゼービュールを？　ビュールゼー湖のほとりのゼービュール村を？　いや、知らないって？　これは奇妙なこと――だれにたずねても、ゼービュールを知りません！（中略）。小さい少女たちが休暇ちゅうに暮らすために建てられている、有名な家です。知らないのは残念ですが、たいしたことはありません。子どものいる家は、一斤のパンはどれも同じようであり、スミレはどれも同じようであるように、似たりよったりです。一つ知っていれば、みんなわかります。(6)

まず1章で双子がテーマであることを仄めかしている。『古都』では、二十歳の双子の娘。中京の娘である千重子が、町家の坪庭に植えられた古木の幹に、二株のすみれを見つけるところから始まる。（春の花）

（前略）大きく曲がる少し下のあたり、幹に小さいくぼみが二つあるらしく、そのくぼみそれぞれに、すみれが生えているのだ。そして春ごとに花をつけるのだ。千重子がものごころつくころから、この樹上二株のすみれはあった。

上のすみれと下のすみれは、一尺ほど離れている。年ごろになった千重子は、「上のすみれと下のすみれとは、会うことがあるのかしら。おたがいに知っているのかしら」と、思ってみたりする。すみれの花が「会う」とか「知る」とかは、どういうことなのか。(7)

『ふたりのロッテ』では、ルイーゼとロッテはドナウ川

のリンツで生まれた（同じ所）。やがて両親は離婚し、音楽家の父バルフィーとウィーンで暮らすルイーゼと、出版社に勤める母ケルナーとミュンヘンで暮らすロッテは、九歳になるまで一度も会うことはなく、双子であることも知らなかった。

『古都』でも、千重子と苗子は、清滝川添いの北山杉の里で生まれているが、双子の一人は京の街中に捨て子にされ、他の一人はその土地中川で育った。二人の実の両親は生後まもなく死亡した。だから千重子も苗子も父母の顔を知らない。これは川端の来歴と類似しており、川端が自己の内にある孤独感と、この設定に重ね合わせている。

ドナウ川・清滝川（保津川・木曽川につづく）・大川（淀川につづく）は、いずれも流路の長い生活川であり、それぞれ人生の紆余曲折を象徴している。ルイーゼもロッテも、千重子も苗子も、康成も、不幸と重なる幼児の記憶はないが、こうした自然環境は身に沁み込むものであり、川端の意識の内に「川」があったとも考えられる。『古都』を書くに当って、『ふたりのロッテ』の川に気づき、『古都』にも川を書き、自己の馴染んだ天満の大川を想う。祖父母と暮らした茨木の宿久庄（しゅくのしょう）に近い勝尾寺川も蘇る。『古都』は、川の流れに添うように筆を進めたと考える。

『ふたりのロッテ』では、義父になるエミールは、地下室で黙黙と手仕事をする孤立的な性格。ケストナーも滅多にその部屋へ入らなかった。『古都』での養父佐田太吉郎は、名人気質で人ぎらい。嵯峨の尼寺に籠って帯の下絵を描いていた。室町の織物問屋の主人らしく商いに熱を入れない。ともに偏人とも言える厭世的な中年の男性を書いている。川端自身もこの二人の性格と重なる部分が見える。

『古都』は下鴨泉川町の離れ座敷を借りて、睡眠薬を常飲しながらもうろうとして書いたと言っているが、作家の孤独を感じる。鎌倉で待つ秀子夫人には「いよいよ牢屋入りです」と書き、手紙は二度しか出していない。

『ふたりのロッテ』も『古都』も、クライマックスは双子同志の出会いのシーンである。ルイーゼとロッテは夏の休暇中に暮らす子どもの家が建つゼービュール村。先着のルイーゼの前にバスから降りてきたロッテ。巻き毛と、お下げ、顔つきがそっくりの少女。ルイーゼは最初は意地わるをするが、夜は寝室でロッテの髪をなでる。なでてくれる相手の子の手をロッテはさぐっている。

千重子と苗子の出会いは、京都の夏の一大行事、祇園祭の宵山（七・十六）が設定されている。花街の風習であり、芸・舞子たちが、深夜にこそこそっと四条大橋を渡るが、喋ってはいけない。喋るとお願いは叶わないという「七度半の無言詣で」のしきたりがある。花見小路から御旅所

（四条寺町）への場面を、川端は二人の出会いの場に選んだ。人通りが多い賑やかな時にしたのは納得し難い。川端は雑踏の中の方が、出会いの妙を生かせると考えたのか。

「ふた子やいうことどすさかい、姉か妹か、わからしまへんのやけど……」

「他人の空似どっしゃろ」

娘はうなずくと、涙がほおを流れ落ちた。はんかちを出してぬぐいながら、「お嬢さん、どこでお生まれやした……」（中略）

千重子の額には、冷めたい汗がにじみ出た。四条の大通りにあふれる人の足音も、祇園ばやしも、遠く消えてゆくようだった。目の前が、暗くなりかかった。山の娘が、千重子の肩に手をかけて、はんかちで、千重子の額をぬぐってくれた。[8]

『ふたりのロッテ』も『古都』も、出会いの驚きと喜び、いたわりとおもいやりの感情は似ている。ケストナーも川端も筆に熱が入り、二人を一人と考える緒（ちょ）となっている。

少女小説で、主人公の少女が家計上の計算を担う設定は珍しい。ロッテは台所の家計簿の支出欄を計算する。第一に、家政婦のレージは、ほとんどどのページでも計算をまちがえている。第二に、いつもじぶんのとくになるように計算しちがえている。「あたし、これからいつもあんたの計算をしなおすわ」と子どもはおだやかに宣言する。

この経済観念は『古都』にも出てくる。千重子の幼馴染みの水木真一は、子どものころ長刀鉾のお稚児さんに出た無邪気なタイプだが、兄の竜助は大学院生で鋭い感性を持ち、佐田家の店のことにも助言している。「千重子さん、お店の番頭さん――会社やから、専務か常務かしらんけど、いっぺんね、千重子さんから、きつうあたっておみやす。」この忠告を聞き、千重子は二十歳の娘とも思えないしっかりした態度で、番頭植村の付ける帳簿をチェックする。「あしたでよろしいけど、帳簿も、ちょっと見せとくれやす」「帳簿？」と、植村は、にが笑いするように、「お嬢さんが、帳簿をおしらべやすのか」（中略）「うちは、二重帳簿どすか」と千重子はあっさりと言う。家計簿と帳簿とでは規模が違うが、川端作品の中に、若い女の子が金勘定などにこだわったことはない。『ふたりのロッテ』と『古都』を読み比べると、このアイディアは川端が借りたとしか思えない。

一編の小説には、読者を退屈させない息抜きがある。『ふたりのロッテ』では、芸術家でもあるルートウィッヒ・バルフィー氏には恋人の美しい若い女性、イレーネ・

ゲルラハ嬢の存在があり、ルイーゼもロッテも、この魔女を父から遠ざけたいと必死になる。『古都』にも、太吉郎が昔通った上七軒がある。北野線のちんちん電車が取りはらわれる以前の「花電車」に乗ろうとして、中年の女にあった。女は可愛い少女をつれていた。

「この子を、祇園の舞子はんに出せたらと、よう、思いますのやけど」「どこの子？」「近くのお茶屋はんの子どす」「ふうん」「だんさんとわたしの子やと、見といやすお人もおっせ」と、女は聞こえるか聞こえぬ声で、つぶやいた。「なに言うてんね」女は上七軒のお茶屋のおかみであった。[9]

双子が枕を並べて寝るシーンがある。一方は夏、他方は冬であるが非常によく似ている。『ふたりのロッテ』は夏。ロッテの隣りに寝ているのはルイーゼ。

不意に、知らない人の小さい人が、ぎこちなくロッテの髪をなでます！　ロッテちゃんは恐ろしくて、棒のようにかたくなります。恐ろしくてかしら？　ルイーゼの手は、はにかみながらなでつづけます。[10]

『古都』は冬、千重子の家で苗子が泊まる。まだ心を許しあっていない少女。まだ本当に親密になっていない娘。双子が一心同体のように許し合う、同じ床に入り労わり合う設定にしたのはケストナーである。物語の始めに書かれたこのシーンを、川端は終りにもってきた。ケストナーも川端も一人子である。少女も娘も「同じ床で寝る」ことによって、はじめて深い絆を結ぶ。兄弟のない二人の作家の羨望が共通している。

千重子が夜具を敷きかけると、苗子はあわてて、「千重子さん、一度だけ、千重子さんのお床を、取らさしとおくれやす」しかし、二つならべた、苗子の床へ、だまって、もぐってきたのは、千重子であった。「ああ、苗子さん、あたたかい」「やっぱり、働きがちがうのどっしゃろ。住んでるところと……」そして苗子は、千重子を、抱きすくめた。[11]

恋については、双子の場合、実際の人と鏡に写る幻影の人との間で混乱が起こるように、瓜二つの二人を混同するハプニングも起こり得る。この点では、ケストナーも川端も同視点である。二人の女性が一人の男性に恋をすることはよくあることで、双子であることを知らなければ、男性

こそ迷惑であろう。小説家としての川端は、いちばん一捻りしたいところで、一人の男性の心の動きの描写に着目したい。

女学校の校長キリアン先生は、楽長バルフィー夫妻が、はじめの女の子と瓜二つの二ばんめの女の子の入学を申しこむと、めんくらったが、ベテランの教育者として、過去にも似たような経験をしたことを思い出した。

「あんたたちが年ごろになって、だれかと結婚することになったら、どうなるだろう?」「あたしたちそっくりなんだから、きっと同じ男の人に好かれるわ。」とルイーゼが大きな声を出します。「そしたら、あたしたちふたりは文句なくその男の人と結婚するわ！それがいちばんいいわ。月、水、金はあたしがその人の奥さんになるの！そして、火、木、土はロッテの番なの！」（中略）。キリアン校長先生は立ちあがって、「その男こそほんとうに気の毒だよ！」といいます。[12]

この男女の心理を川端はより深く細かく書き上げている。少女ではなく、年ごろの娘としての心の襞を書くことに力点をおいている。『古都』では、千重子が北山杉中川へ苗子をたずねたとき、「じつは、秀男さんが、結婚してほしい、お言いやしして、それで……」と千重子に告げている。

「ええやないの」「ええて――？　秀男さんは、お嬢さんの幻として、苗子と結婚したい、お思いやしたんどす。娘のあたしには、はっきりわかります」と、また苗子はくりかえした。千重子はなんと答えていいのか、迷いながら歩いた。[13]

秀男は以前から千重子に恋心を抱いていて、自分が織った帯を千重子にしめてもらいたかった。千重子も秀男が好きだった。秀男は苗子を身代りにしている。苗子はそれを見抜いていた。苗子は本当は秀男に好意を寄せているのに逃げている。秀男は父宗助に釘をさされている。「そやけど、秀男、まだ身分がちがうで……」と。

苗子のために織ってほしいと、千重子は秀男に、自分が描いた帯の図案を託す。秀男は織っているうちに、千重子と苗子が一つになってしまう。秀男は、赤松と杉の図柄の帯を北山杉の苗子に届ける。そして、時代祭（十月二十二日）に苗子と会う約束をする。「ひつこいようどすけど、時代祭りには、きっとな。御所の西門、蛤御門どっせ」「はい」と、苗子は深くうなずいた。苗子はその帯をしめて御所の門の脇で秀男を待った。「待っとくれやしたか」

と秀男が来た。織師にとって、自分の織った帯がきれいな娘に締められることほど、嬉しいことはない。ここらあたりから、秀男は、苗子は千重子の幻ではなく、現実の一人の娘と思うようになり求婚する。しかし、苗子は、「秀男さんは、お嬢さんの幻として、苗子と結婚したい、お思いやしたんどす。娘のあたしには、はっきりわかります」と言い、千重子を困らせる。

娘心の綾を書くには、川端の筆は秀逸である。『ふたりのロッテ』より『古都』の方が、はるかに奥深い。『ふたりのロッテ』はハッピーエンドで終っている。『古都』の終りを、どのように解釈するか。読者にもよるが、童話と、新聞小説の違いとも考えられる。

なほ書きつづけてゆくと、「古都」は様相を変えて必然二人の娘の悲恋、悲劇になってゆくであろう。千重子は龍助とも、真一とも、恋愛しないし、結婚もしないだろうし、また北山杉の苗子は秀男とも恋愛もしないし、結婚もしないのではないかと、さういふ予感が作者にある。[14]

京都の街の旧家は、昔から養子養女をもらってでも後を継がす伝統がある。いずれ秀男は苗子と、竜助は千重子と結婚するであろう。千重子は幻でないと秀男は苗子を説得する。千重子はお店（たな）を繁栄さすためにも、竜助と添い遂げ、竜助の脇力を得て佐田家への恩返しをする。『古都』の結末は京都人に委ねたい。

第四章　ケストナーと川端の接点

ケストナーも川端も国際ペンクラブに所属し、それぞれ自国の会長をしている。川端は各国で行われた国際大会に必ず出席していたから、どこかで両者は出会う可能性があったと推察する。昭和三十二年（一九五七）九月二日、東京で第二十九回国際ペンクラブ大会が開催された。その半年前から川端は会長として東奔西走している。フランス・イギリス・西ドイツ・イタリア・デンマーク・アジア各国に参加要請の旅をしている。この時にケストナーと出会うことはなかったのか。

閉会式は、京都嵐山・天龍寺の書院で行われ、アンドレ・シャンソン国際ペン会長が挨拶をしている。

こうして何回も私があいさつをしなければならないということは、別れなければならないことが近づくことでもあるが、それにもまして日本会員の招いて下さったこのすばらしい京都のせいだろう。どういう言葉

で表現してよいのかわからないが、私は哲学の中に美という言葉があるならば、この美の中に求めるということができる。皆さんはわれわれの兄弟だ。日本の人達が花束をつくるようにわれわれも世界の花束をつくりたい。[15]

閉会後は、同寺の方丈へ。辻嘉一による懐石料理が用意された。夕方からは南禅寺の野村別邸でのガーデンパーティー。井上八千代の「倭文（やまとぶみ）」（京舞）を観賞したが、折よく台風一過の中秋の名月の宵となる。出席者の京都の印象は上々。各国のペンマンも大喜びした。

この会に、ケストナーは参加していたか。川端との出会いはあったのか。共に五十八歳、多忙を極めたこの年。ケストナーは『独裁者の学校』を上演。ゲオルク・ビューヒナー賞を受賞。『わたしが子どもだったころ』刊行。川端自身も、国際委員会出席のため渡欧し、モーリャックやエリオット等に会っていたころであり、自作を練る時間的余裕はなかったであろう。ただ、「もし参加してくれたら…」と密かに期待していたかもしれない。

ドナルド・キーンによると、川端は「外国語をまるで解さぬ上に、同時通訳を使えないこともしばしばであったにもかかわらず、ペンクラブの大会には、国内であれ海外であれきちんと出席した。会場で会うと川端の方からにこやかに握手してくれた[20]」と言っている。こういう日本人は珍しいそうで、活動的で社交性のある一面を、日本の読者はとかく見過ごしがちである。大戦中は沈黙を守り、ひっそりと『源氏物語』などを読んでいた。常に時代の状況を見聞する作家精神ともいえる。

ケストナーは違う。常に体制と斗い続けた。「大国への手紙」（一九四八）という詩がある。

ちゃんと、落ち着いて話しましょうか？
あなた方が、どんなに理屈をこねても、
あなた方が、どんなに正義をかかげても、
まちがいは、まちがいなのです。
昔の犯罪を理由にして、そのおろかしさを説明されても、
いいわけにはなりません。[16]

ケストナーには多くの栄誉が授けられた。ミュンヘン市文学賞（一九五六）、ゲオルク・ビューヒナー賞（一九五七）、国際アンデルセン賞（一九六〇）、ドイツ・フリーメーツン賞（一九六八）、ミュンヘン市文化名誉賞（一九七〇）、ミュンヘン名誉金メダル（一九七四）。これらの栄誉

は、モラリストとして、ヒューマニストとして神話化された自身であり、現役の作家に贈られたのではないことを知っていた。

一九七四年二月二十三日、エーリヒ・ケストナーは、七十五回目の誕生日を祝い、同年、七月二十九日に死亡。葬儀に際しては、ワルツ『バラの騎士』が奏でられたという。

川端康成も多くの賞を受賞している。文芸懇話会賞（一九三七）、菊池寛賞（一九四四）、芸術院賞（一九五三）、野間文芸賞（一九五四）、フランス政府より芸術文化オフィセ勲賞（一九六〇）、文化勲賞（一九六一）、毎日新聞出版文化賞（一九六二）、日本人初のノーベル文学賞（一九六八）。全ての受賞式には、和の心を大切にしながら挨拶をしている。

一九七二年四月十六日、川端康成は、逗子の仕事部屋で自ら命を断った（七十二歳十ヶ月）。秀子夫人は「私には主人が何で死んだかわからないんです」と泣き崩れたという。孤児の文学者と言われた川端の末期であった。

ケストナーと川端とは、客観的にみると接点があったようにも思えるが、生まれ持った性格、置かれた状況も異なる。やはり両者の出会いは無かったであろう。両作品ともに一人の母を想う気持は同じであり、現実に接点は無くても、むしろ、名作は直感と想像の賜物と成り得ると考える。

第五賞　母への道

『ふたりのロッテ』は、かわいい双子の少女の物語であり、ハッピーエンドで終わる。翻訳者高橋健二（一九〇二―一九九八）は、東京生まれ、東京帝国大学ドイツ文学科卒業、ドイツ留学。他にも、ヘルマン・ヘッセなどの翻訳、紹介にも務めた。本著の名訳によって日本でも大歓迎されている。賢く実行力のある九歳の女の子は、ときには大人より知恵を働かす。川端は、この双子の少女に着目し、より深みのある大人向きの小説に設定を変更。京都という『古都』を舞台にしたと考える。

ケストナーの『ふたりのロッテ』のかわいい双子の少女は、一人のようにも見えたりして、やがて、きれいな双子の娘に成長する。それは、川端が持ち続けた美意識と孤独感とが重なるところにあった。自死の半年前に発表された短編小説に、それが表現されている。敗戦後（一九四八）から翌年にかけて発表された『反橋（そりばし）』『しぐれ』『住吉』の三作の後、最後の筆となった『隅田川』を加えて四部作と言われている。『しぐれ』には、若いころ、浅草の双子の娼婦となじみになった話を書いている。友人の須山と一緒だった。

絶筆『隅田川』は、「新潮」創刊八百号記念号（一九七

一・十一・一）の冒頭に掲載されている。梗概を以下にたどってみる。

あなたはどこにおいでなのでせうか。
あれは我が子か、母にてましますかと、
たがひに手をとりかはせば、また消え消えとなりゆけば、いよいよ思ひはます鏡、面影も幻も見えつ隠れつするほどに、東雲（しのめ）の空もほのぼのと明けゆけば跡絶えて、我が子と見えしは塚の上の草茫々として、ただ、しるしばかり浅茅が原となるこそあはれなりけり。[17]

謡曲「隅田川」の話を、幼いころ母（育ての親）が聞かせてくれた。十二三の春、京都の能楽堂へもつれてもらった。須山と二人で浅草へ娼婦を買いにいったが、二人とも名前は同じたき子。「ともすれば地獄の焔。」と友人の須山が目くばせをした。

それを私も須山もが、二人の娘のどちらともわからなくなってゐた。二人で一人、一人で二人のやうであったのは、虚構の逸楽、堕落の麻痺によることでありましたでせう。しかし、逸楽と麻痺とから愕然と覚める一瞬もありました。[18]

ついに康成は、実母の写真すら見せてもらえなかった。「お嫁入りの写真や僕のお宮参りの写真もないの？」と聞いたが、「あったかもしれないけれど、お母さんがやぶいて捨てたのかもしれないわ。」「どうして？」「嫉妬。お母さんがお姉さんにやきもちをやいたからでせう。」産みの母の写真は始末されていた。

さうして、時どきは、産みの母の面影を育ての母に見るといふよりも、二人の母はそっくりの姿、二人が一人と思ふこともあるやうになりました。そんな私がまったくそっくりの双生児の娼婦にめぐりあふ日があったのでありました。それも今はむかしとなりました。
（了）

この二人の母（姉妹）の存在が、双生児の娼婦・たき子と重なり、『古都』の双子姉妹の造形にも影を落としているのではないだろうか。

新潮社としては、八百号を祝う作品を願っていたと思うが、川端の心境に他者を思うゆとりはなかった。作家というより、一人の男の子に還っていた。

おわりに

エーリッヒ・ケストナーも川端康成も七十歳代で世を去った。それぞれ趣きは違うが、文学の底を流れているのは、「母恋し」である。脇役としては、男性が多いが、控えめにそれぞれの個性が生かされ、よく二人を支えていて見事である。ともに男性の一卵性双生児は書かれていない。

ケストナーは、長年の伴侶エンダーレに見送られ、ワルツを聴きながら去っていった。川端は、いつものように散歩するつもりだったのか、黄泉路も独りで歩いていった。

「やっとおかあさんにあえる……」と。

この日、鎌倉の空は晴れて、由比ヶ浜から望む夕日は、いつにも増して美しかったという。

了

注

(1)『ふたりのロッテ』p42・p44　エーリヒ・ケストナー作　高橋健二訳　一九九五・一二・五　57刷　岩波書店

(2)『古都』p112　川端康成作　一九六二・六・二十五　初刷　新潮社

(3)「葬式の名人」p39　林武志編　一九八二・十一　『鑑賞日本現代文学15』　角川書店

(4)『ケストナー――ナチスに抵抗し続けた作家――』p355　クラウス・コードン著　一九九九・十二　那須田淳／木本栄訳　偕成社

(5)「古都を書き終へて」p184　新潮社、『川端康成全集・第33巻』p184　新潮社

(6)『ふたりのロッテ』p11・p12

(7)『古都』p7・p8

(8)『古都』p113

(9)『古都』p136

(10)『ふたりのロッテ』p29

(11)『古都』p239

(12)『ふたりのロッテ』p204

(13)『古都』p222

(14)「古都を書き終へて」p185

(15)『川端康成――内なる古都』p98　河野仁昭著　一九九五・六・十　京都

(16)『ケストナー――ナチスに抵抗し続けた作家――』p323

(17)『隅田川』p14　川端康成著

(18)『隅田川』p17　川端康成著

(19)『隅田川』p18　川端康成著　「新潮」第六十八巻第十二号――創刊八百号記念十一月特大号――　酒井健次郎編集発行　一九七一・十一・一　新潮社

(20)『ドナルド・キーン著作集　第四巻　p36　思い出の作家たち　二〇一二・六・二十五　新潮社

（今秋、『古都』現代版が上映される。11・26京都先行。12・3全国公開。文部科学省特別選定作品。）